

地域連携教育を進めるための授業プログラムの開発
とその一考察：「地域連携教育研究B」を事例として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅原, 雅浩, 澁谷, 政子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10354

地域連携教育を進めるための授業プログラムの開発とその一考察 —「地域連携教育研究B」を事例として—

福井大学教育学部 浅原 雅 浩

福井大学教育学部 澁谷 政子

福井大学教育学部初等教育コース3系（学校・地域連携系）では、系必修科目として「地域連携教育研究B」を設定した。初開講となる平成29年度は、福井県嶺南地域の教育関連施設、公立小学校および地域の体験活動支援団体の協力を得、地域連携教育の基礎について、現場実習および各機関を代表する協力者へのインタビューを通じて学ぶ授業プログラムを展開した。今回開発し実践した授業プログラムは、地域の実情を調査した上で、地域の教育リソースを活用した学習活動の提案を行い、学校・地域連携の現状と課題について省察するものである。更に、学生からのレポートを元に、本授業プログラムの意義と効果について考察した。

キーワード：地域連携、特別活動、企画運営、インタビュー、集団宿泊的行事、ICT活用

1. はじめに

平成27年12月に中央教育審議会において取りまとめられた「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）」¹⁾において、これからの地域と学校の目指すべき連携・協働の方向性（姿）として、

- ① 地域とともにある学校への転換
- ② 子供も大人も学び合い育ち合う教育体制の構築
- ③ 学校を核とした地域づくりの推進

の3点が示された。これらの背景として、地域社会のつながりや支え合いの希薄化等による地域の教育力の低下や、家庭教育の充実の必要性、更には、学校が抱える課題の複雑化・困難化が指摘されている。答申では、これからの厳しい時代を生き抜く力の育成、社会的な教育基盤の構築等の観点から、学校と地域がパートナーとして互いに連携・協働していくことに活路を見出そうとしている。

また、平成29年3月公示小学校学習指導要領²⁾では、全体を貫く理念として、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」が掲げられており、「各教科等において身に付けた知識及び技能を活用したり、思考力、判断力、表現力等や学びに向かう力、人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方が鍛えられていくことに留意し、児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること」が求められている。こうした学習を実現する1つの手法として、前述した答申に

示された「地域と学校の目指すべき連携・協働の方向性（姿）」の3点に基づく、地域との連携は有効と考えられるだろう。

これら時代のニーズへの対応可能な教員養成を目指し、福井大学教育学部学校教育課程初等教育コース小学校教育サブコース3系（学校・地域連携系）では、系必修科目として新設した「地域連携教育研究A・B」を中心にカリキュラム開発を行っている。今回、「地域連携教育研究B」（2年次前期配当）の授業プログラムの開発にあたっては、上記の背景を踏まえ、次の5つの視点を設定した。

- ① 地域と連携した教育の望ましい在り方や教育の展開方法について理論的な理解を行う。
- ② 地域の中で主体的に生きる力をもった児童を育成する力を伸ばすことができる小学校教員としての資質である、地域の(1)教育リソース素材の発見力、(2)教育リソースの開発力、(3)教育リソースの活用力を身につける。
- ③ 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることを理解し、行動の仕方を身に付けるようにするための方策を探究する。
- ④ 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする方策を探究する。
- ⑤ 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己実現を図ろうとする態度を養うための方策を探究する。

地域連携の現状を知ることに重点を置いた「地域連携教育研究A」に対して、「地域連携教育研究B」は、自ら

の地域での体験や調査を通じて、1つの教育プログラムを組み上げていくことに重点を置いている。本稿では、上記5つの視点に対応する授業プログラムの開発からその実践と結果、そしてその考察までを、以下順に述べていく。

2. 開発の背景

平成29(2017)年度に実施した「地域連携教育研究B」の授業プログラム立案に当たり、昨年度実施した「地域連携教育研究A」および新潟県における地域連携教育の先進的な取組に関する調査結果³⁾を踏まえ、上記視点①～⑤のうち、視点①②を中心として、「授業プログラム」化を進めた。その結果、実践する上での具体的な留意点について、次の(a)～(f)に整理した。

- (a) (小)学校と地域が連携する上で、ある特定の地域には、どのような教育リソースがあるのか
- (b) そのリソースをその地域の(小)学校はどのように活用しようとしているのか
- (c) その地域には、その他どのようなリソースがあるのか
- (d) これらを統合して、(小)学校の教育に地域の協力を得るにはどのようなアプローチが必要なのか
- (e) 地域に存在する(小)学校教育に資する機関があったとして、その機関が、今後更に、(小)学校教育にコミットするには、どのようなアプローチがあるのか
- (f) (小)学校の担当者は、そのアプローチを地域の担当者どのように伝えたらよいか

併せて、小学校学習指導要領第6章特別活動⁴⁾に示された、視点③～⑤も実践的に学べるように開発を進めた。そのため、特別活動に位置づけられている〔学校行事(4)遠足・集団宿泊的行事〕に対応する体験型学習を組み込んだ。宿泊先は民宿とした。

近年、グリーンツーリズム⁵⁾、体験型教育旅行(修学旅行)^{6,7)}等において、農家や漁村等に直接宿泊するプログラムも展開されている。これら集団宿泊的行事に相当するプログラムの体験後は、挨拶や礼儀、友達との協力、思いやりの気持ちや感謝する気持ち、積極性、自立、自我意識、また子ども同士の間関係の深まり等が確認されている⁵⁾。一方で、このような効果のある民泊を継続するためには、宿泊費のコスト(保護者の負担)、引率教員の負担、受入地域の関係者の負担等の軽減対策が求められており⁵⁾、更には、地域におけるキーパーソンおよび大規模学校を受け入れるための協力民家(世帯)の勧誘の必要性が挙げられている⁶⁾。また、今後の検討課題として、「教員と生徒では、民泊に対して持つ印象が事前の知識から違うのではないか」という点が指摘されている。また、林は、特別活動における自然体験活動型の集団宿泊活動の役割⁸⁾に関して、2点述べている。第一は、他教科との連携である。小学校5年生で実施された事例では、特別活動〔学校行事〕に加えて、〔学級

活動〕、国語、社会科、総合的な学習の時間として実施されている。例えば、事前の調べ学習、事後のまとめや発表活動を総合的な学習の時間として、農業体験を社会科として、更には、森の句会や礼状の手紙を国語の時間として組み込んでいる。第二は、指導者養成の必要性である。研修を受けた(学生)ボランティアや活動補助員の存在が、学校行事等を実施する教師集団への過剰な負担の軽減に繋がるのではないかと期待される。

最近、山本らは、日本国内にも点在するユネスコジオパーク事業と連携した特別活動に関して報告⁹⁾した。ジオパーク¹⁰⁾とは、「地球・大地(ジオ:Geo)」と「公園(パーク:Park)」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味し、2016年9月時点で国内に51地点指定されている。地域の自然的・社会的文脈におけるESD(Education for Sustainable Developmentの略)としても捉えることができ、児童生徒の社会参画の基盤となるような自然体験活動の場として、教科横断的な学びの場としても期待されている。

これらの指摘は、今回の授業プログラムを開発する上での重要な知見であり、実践する上での具体的な留意点(a)～(f)と重なる事項が多数含まれている。

3. 授業プログラムの概要と実践フィールドの選定

3-1. 授業プログラムの概要

今回、表1に示す授業計画(シラバスから抜粋)を作成し、実施した。

「地域連携教育研究B」は、平成28年度後期に実施した「地域連携教育研究A」³⁾の受講者に対して設定したものである。学校が地域と連携して行う事例研究を中心に計画した「地域連携教育研究A」に対して、学生自身が、地域の学習素材を元に、その特性を活かした教育プログラムを作成することを目的として構成した。また、自身の体験を踏まえたプログラム化を目指すため、実際に、地域の特性を2泊3日の合宿型現地研修の中で、肌で感じながら行える環境を整えた。更に、インプット中心であった「地域連携教育研究A」の内容と実践および体験中心の「地域連携教育研究B」を省察的に統合していくことを目指し、地域の公民館主事や県市町の職員等が多数参加している「福井ラウンドテーブル2017 Summer

表1 平成29年度「地域連携教育研究B」の授業計画

第1回	全体ガイダンス
第2回	美浜町予備調査報告会と合宿研修の事前説明 インタビュー実施方法を含む事前打合せ
第3～8回	美浜町内での2泊3日現地実習
第9回	現地実習の省察と成果発表の事前打合せ
第10～12回	成果発表会の準備
第13回	福井ラウンドテーブル2017での成果発表
第14回	成果発表の省察
第15回	地域連携教育研究A・Bの省察

Session」でのポスター発表と、これら全てを統合した省察レポートの作成までを組み込んだ。なお、授業プログラム全体を通じて、できる限りICT活用力の向上に資する活動（例：調査・資料作成・コミュニケーションアプリの活用等）を組み込むこととした。

3.2. 実践フィールドの選定

今回のフィールドである福井県三方郡美浜町は、平成18年度からエネルギー環境教育カリキュラムの準備を進め、平成19年3月に町内統一の「副読本」¹¹⁾を作成し、平成19年度より町全体で小学校1年生から中学校3年生までの9学年を通したカリキュラムに基づいた授業を、総合的な学習の時間を活用しながら開始した。その後、学習指導要領の改訂（平成20年3月公示）に伴い、主として、総合的な学習の時間を活用して実施していた内容を、理科・社会・技術・家庭科などの教科の時間に組み込み、教育内容の変化に合わせた形で進歩させてきている。この過程で培ってきたエネルギー環境教育カリキュラムのうち、場所や設備品、教材あるいは講師の問題で、小中学校内で実施するにはハードルの高い内容を抽

出し、町内外の児童生徒あるいは一般市民にも体験してもらうことを目的として「美浜町エネルギー環境教育体験館（愛称：きいばす）」（以降、きいばすと省略）を、美浜町が整備した。この「きいばす」を地域と学習支援機関との連携学習の場として、今回フィールド調査を行うこととした。一方、美浜町の若狭湾に面した海岸部分は、一部を除いて若狭湾国定公園に指定されている。きいばすの近隣にも、砂粒が細かく白い砂と透明度の高い海が特徴である水晶浜があり、豊かな自然の中に立地している。美浜町は、その自然を活用した教育旅行や体験活動の支援も積極的に行われている地域であり、「若狭美浜はあとふる体験推進協議会」¹²⁾が設立され、農林業体験、漁業体験、味覚体験、工夫・歴史文化体験、自然・アウトドア体験の5つのカテゴリに分類され、児童生徒・一般の自然体験、更には、民泊を通じた人間関係構築能力の向上などについても支援を行っている地域である。

今回、これら①地域の科学的な教育資源（きいばす）、②町内外の児童生徒に対する教育旅行や体験活動を受け入れる団体（若狭美浜はあとふる体験推進協議会）および、③実際に、年間指導計画の中できいばすの継続的な使用を進めている美浜町内の小学校と連携することが可能となったので、実践フィールドとして選定した。

以上の地域の現状と留意点(a)～(f)を踏まえ、2泊3日の現地実習プログラムを開発し、表2にまとめた。

表2 美浜町における2泊3日現地実習プログラム

第1日目（2017年5月19日）

- 13:10 福井大学教育学部集合 厳守
- 13:15 福井大学発
- 14:45 きいばす着 職員へインタビュー
- 16:00 小学校着 校長・担当教員へインタビュー
- 17:00 公会堂着 はあとふる体験関係者へインタビュー
- 18:30 夕食
- その後、入浴・インタビューのまとめ・就寝

第2日目

- 3:00頃 起床
- 4:00 大敷網体験（はあとふる体験の1つ）
- 7:00前 体験終了
- 7:15 民宿にて朝食
- 8:00 民宿にて仮眠
- 10:00 民宿発 きいばすにて、

A班：魚さばき	}	その後、調理
B班：竈ご飯炊き		
C班：買い出し		
- 13:00 きいばす職員とともに昼食
- 15:00 新規、町内融合学習プログラムの開発検討
- 18:30 きいばす発、民宿へ移動
- 18:45 夕食
- 19:30 入浴後 プレゼン資料作成①

第3日目

- 7:00 民宿にて朝食
- 8:00 荷物をまとめて、きいばすへ
- 8:30 プレゼン資料作成②と施設の内容確認
- 10:00 融合学習プログラムのプレゼンと質疑応答
- 12:00 昼食
- 13:00 きいばす発
- 15:00 福井大着

4. 授業プログラムの実践（日程）

本授業プログラムは、平成29年度前期に実施し、その受講者は、福井大学教育学部学校教育課程初等教育コース小学校サブコース3系（学校・地域連携系）に所属する学部2年生8名である。当該学生は、全員、平成28年度後期に「地域連携教育研究A」を受講済である。現地実習は、平成29年5月19日(金)午後～21日(日)の3日間で行った。担当教員3名（1名は部分参加）が随行し、学生は2日間とも美浜町丹生地区の民宿に連泊した。本プログラムでは、大敷網を体験する第2日目の早朝4:00に、丹生公会堂前に集合するため、宿泊は不可避である。

なお、受講者8名は、事前の4月22日～5月3日の間の土日祝のいずれか1日、2名1組できいばすを訪問し、施設の休日利用に関する予備調査を行っており、きいばすの設備や教育プログラムの内容については、事前に、きいばす職員から説明を受けている。

6月末迄に、美浜町へ提出する提案書を作成し、また、7月末迄に、最終レポートを作成した。5月23日～6月20日までの授業時間を活用し、現地実習の省察と6月24日(土)の午後に開催される福井ラウンドテーブル2017でのポスター発表準備と事前練習を行った。

5. 結果と考察

5-1. インタビューの事前準備

本プログラム実施にあたり、きいばすでの事前調査を踏まえた上で、①きいばす職員、②きいばす利用を計画している小学校担当者、および③はあとふる体験事業者に対するインタビューの内容について事前に検討した。整理した内容を表3に示した。

① 受入側のきいばす職員に対して

平日の学校利用と休日の一般利用の観点から、「対象年齢は」「安全管理で意識していることは」「子どもにどうやって説明するのか」「学ぶことと楽しむことのバランスは」「(我々が事前調査で体験したもの以外に)どんな教育プログラムがあるのか」「学校利用の場合でも、施設使用料は必要か」「新プログラムの開発は」等の質問内容が上がってきた。整理すると、きいばすの運営・機能・コンセプト・対応・体験プログラムの研究開発についての5点であった。

② 利用者側となる小学校担当者に対して

「(既に、各学年、年3回利用することが決まっているとのことだが、)どんな目的で、どう利用するのか、また、このことについてどのように思っているのか」「今までに、地域を利用した授業を行ってきた事例は」「事前打ち合わせはどのように行うのか」「きいばす利用の際の、事前・事後学習はどのようなものか」「主に理科での活用は想像できるが、その他どの教科が対象となるのか」など、地域(の施設)と学校が連携する上で、大学2年生の段階で想像できうる限りの現場目線での質問事項が上がってきた。加えて、今後、各校に設置が求められている地域連携担当教員やそのカウンターパートとなる地域連携コーディネーターに関する質問も検討された。

③ 地域で自然体験活動を受け入れる組織の関係者(はあとふる体験事業関係者)に対して

「ターゲットはどの世代なのか」「人気のプログラムは何か」「受入人数とその基準は」「安全対策は」「はあとふる体験で何を学んで欲しいか、あるいは、学べると考えているか」などである。学生等は、これまで、このような地域の団体の存在を知らなかったため、地域の農家・漁師・民宿の女将等様々な職種の方々と直接関わるはあとふる体験事業そのものに対する興味を持った。また、現場体験の2日目の大敷網漁のことに関連して、安全面に関する質問事項が抽出された。

5-2. 当日のインタビュー

各インタビュー対象者への依頼状とともに、インタビューの内容(表3)を事前に郵送し、当日のインタビューに臨んだ。実際には、3つのインタビューはそれぞれ異なる形式で行われたため、学生にとっては、少々戸惑いもあったが複数のインタビュー形式を1度に学ぶよい機会となった。以下、(i)～(iii)にそれぞれの詳細を

示す。

(i) きいばす職員へのインタビューは、学生のうち1名を司会者とし、その1名が順番に質問者(学生)を指定し、その学生の質問に対してきいばす職員が回答していく形式で進んだ。インタビュー時間は約30分であった。

(ii) 小学校でのインタビューでは、まず、先方による全体像(当該小学校で実施してきた地域連携事業、きいばす利用に関する美浜町内小中学校のスタンス等)の説明があった。引き続き、事前送付した質問内容全てに対する回答があった。その結果、学生のインタビューは、準備した質問項目以外、あるいは、先方からの説明に対する補足的な質問のみを行う形式で進むこととなった。また、インタビュー会場に、昨年度、きいばすを活用した授業に関する予備調査を担当した教員も同席され、小学校5年理科あるいは、4年社会科におけるきいばす活用に関する実態的な解説もあった。基本的には、通常の授業に組み込むことが重要であり、特段の事前学習や事後学習は行わないし、特別な授業としては組み込まない。それでも、通常であれば不要な小学校と施設の間の移動時間が生じてしまう。そこで、最大限時間を有効利用するため、給食後直ぐにバスで移動し、施設での授業を行った(受けた)後、帰りのスクールバスに間に合うように小学校へ帰るという流れを選択した。全体カリキュラムに負担が生じることが問題となるので、あくまでも通常行すべき授業を校外の施設(きいばす)で行うというスタンスでの利用を徹底的に考えているとのことであった。加えて、地域連携担当教員や地域連携コーディネーターの現状についても詳しく説明頂けた。従って、インタビュー中の質問時間は短くなったが、事前に、質問事項を伝えておく意義について学ぶことができた。インタビュー時間は、約45分であった。

(iii) 美浜町はあとふる体験推進協議会の会長・事務局長・漁師さんへのインタビューでは、始めに、事務局長から簡単なはあとふる体験事業に関する全体像の解説と一部事前お伝えしておいた質問事項を含めて回答頂いた。その後、司会者となった学生がインタビューの場を進めていく形式で行った。はあとふる体験は、学生教育旅行が主な対象である。このため、グリーンツーリズムというよりも、地域の産業を、本事業を通じて下支えするという基本理念とした事業である。加えて、地域の自然と歴史、産業と文化等、これらをありのまま見に来てもらうと同時に、地域の人々とも交流してもらう。体験を通じて、地域を感じてもらい、地域の人々と交流することが目的であって、体験することのみが目的ではない。なお、様々な体験活動の提供を維持するには、町内の様々な業種の地元民に関わってもらう必要があるが、それぞれの思い

表3 受講生から各機関インタビュ担当者への質問事項

	さいばす担当者への質問項目	さいばす利用予定小学校担当教員への質問項目	はあとふる体験事業者への質問項目
学生A	お客さんとの関わりで大変なことは何か。 安全管理で意識していることは何か。 楽しむスタンスか、学ぶスタンスかどちらを心がけているか。	年3回について、どんな目的で、どう利用するか、また、どう思っているか。 教科は何を考えているか。 今までもエネルギーに関する学びを行ってきたか。	はあとふる体験事業者への質問項目 ターゲットはどの世代なのか(学生?旅行者?)。 人気プログラムは何か。 はあとふる体験は何を目的にしているのか。
学生B	お客さんと関わる上で、大変なことや困ったことは何か。 安全管理で気を付けていることは何か。 楽しむか、学ぶか、どちらを重視しているのか。 見学させて頂いたもの以外で、どんな教育プログラムを現在考えているのか。	年3回、さいばすを訪問する目的は何か。 今まで、地域を利用しての授業を行ってきたこと何か。さいばすが初めてなのか。 どの教科で利用したいと考えているのか。	どの層をターゲットとして、体験を考えているのか(子ども?大人?旅行者?)。 人気のプログラムは何か。 はあとふる体験を通して何が学べると考えているのか。
学生C	お客さんと関わる上で、大変なことは何か。 安全管理で意識していることは何か。 子どもにどうやって説明するのか。 学習が中心か、それとも、遊びが中心なのか。 学校利用で入館料をとるのか。	年3回さいばすを利用することについて、計画も含めどう考えているのか。 さいばすを利用する目的とその教科は何か。 今までにエネルギー環境を考えた授業は行ってきたか。 さいばすとの打ち合わせは、どのように行う予定なのか。	どういう方々を対象としているのか。 人気のプログラム何か。 それぞれの体験を通しての意図は何か。 リスクマネジメントは、どのように行っているのか。
学生D	混雑時に昼食をとれるスペースはあるか。 さいばすをどのように宣伝しているのか。 どのような流れで、新規プログラムを開発されているのか。	地域の施設を使用する場合、どんなところに注目に選択されるのか。 さいばすを活用する際の事前・事後学習は、どのようなものなのか。 さいばすを活用して子どもたちに何を学ばせるのか。	受入人数は、どの程度か。その基準は。 安全管理をどのように行っているのか。 田植えや、漁業体験などは、地域住民の方々の協力のもと行っているのか。
学生E	小学生に何を伝えようとしているのか。省エネについて学ばせたいのか。 対象年齢についてどのように考えているのか。	何が目的で、この地域連携の施設を活用することになったのか。 さいばすで学習する際の事前学習についてはどのように考えているのか。 体験だけで終わらせないための方策は何かあるのか。	
学生F	対象年齢の設定は、小学生なのか。 エネルギーから何を学んで欲しいか。 一度に何人ぐらいの人数に対して体験が可能なのか。 「楽しい」次のエネルギーとのつながりは何か。	さいばすを利用する際の目的と事前学習は何か。 さいばすを使用する際のタイムスケジュールが知りたい(1日中 or 移動)。	地域の人の利用と地域がいの人の利用は、どちらが多いのか。 利用人数はどの程度か。 それぞれの体験で、一度に体験できる人数は何人か。
学生G	施設の内容が幼稚園児や低学年には、難しいと感じました。遠足で来た時などは、どのように分かりやすく説明しようと考えておられますか。	さいばすを利用することで、理科については、よく学べると考えられるが、例えば、理科のない低学年などを含め、他の教科では何を学ばせるために、どのように活用しようと考えているのか。	危険なこともあるかと思われるが、どのような対策を取っているのか。
学生H	お客さんと関わる上で、大変なことを教えてください。 安全管理について、意識されていることは何ですか。 「学ぶこと」と「楽しむこと」のバランスについては、どのように考えていますか。 館を用いた教育プログラムには、どんなものがありますか。	年3回、さいばすを訪問する目的は何か。さいばすを活用することですか、どのようにお考えですか。 どんな目的を持って、さいばすに行かれるのですか。 どの教科を対象として、さいばすに行かれるのですか。 環境関係の学習として、これまでに Rowe に行われてきた内容について教えてください。	どんな人々をターゲットにされた体験なのでしょう。 人気のプログラムについて教えてください。 はあとふる体験は、何を目的に開始され、現在も継続されていらっしゃるのでしょうか。

は様々である。ボランティアというイメージの比重が高い方から商売として生業としてのイメージが強い方までの集合体ではある。その中で、約200名がまとまりながら平成15年以降継続してきた事業である。現在、国内外の小中高校単位の利用客が多数を占め、体験活動利用者の約90%に及ぶ。民泊（ホームステイ）の利用者も最近増加している。この他、安全面の話、事業を継続していくための経済基盤や行政の支援、はあとふる体験プログラムの維持と改編に関すること、更には、小学校教員に期待することなどの質問に対し、詳しい回答があった。インタビュー時間は、約45分であった。

5-3. はあとふる体験：大敷網

自然体験および職業体験を兼ねて、翌朝、大敷網漁船に乗船した。早朝4:00港集合であったため、近隣の民宿に宿泊した。集合後、カッパに着替え、救命胴衣を装着し、全体の注意事項の説明を受けた後、4:30頃出航した。漁の風景を図1に示した。実際の漁に同席させて頂く形での体験であるため、体験者数は、30名程度が限界であり、基本的には、漁師さんたちの仕事の邪魔にならないよう指示に従った行動を取るようになる。図1に示したとおり、網を引く作業の一部を行わせて頂く場面もあるが、小学生の場合は見学のみとなる。近年、漁獲量は減っているそうだが、5月の時期は比較的漁獲量が多いようであった。この大敷網体験自体は、3月～10月頃までとなっている¹²⁾。



図1 大敷網漁体験

漁終了後、浜価格にて、獲れたての魚の中から、ワラサ、カワハギ、トビウオを購入し、当日の昼食づくりの食材とした。

5-4. 調理体験

魚を購入した後、民宿に戻り、朝食を取った後、約2時間の仮眠を取り、10:15頃からきいばすにて、調理を開始した。受講学生を魚さばき班3名、かまどでのご飯炊き班3名、および調味料等の買い出し班2名に分け、作業を開始した。3組の選考は、コミュニケーションアプリLINEのあみだくじ機能を用いて行った。きいばすは、元小学校の校舎を増築改修して使用している施設であり、調理室も備えている。また、昔のエネルギー環境を学べるように、「昔体験農家」が敷地内に整備されており、福井県藩士・由利公正が考案した三岡へつつい（か

まど）が備えつけられている（図2 中段左）。

魚さばき班は、調理室に、ワラサ1匹、カワハギ2匹、トビウオ5匹を持ち込み、YouTube等でさばき方や調理法を検索し、確認しながら魚さばきを進めて行った。3人で相談しながら、それぞれをどのような料理にするか検討を進めた。その結果、ワラサは刺身、煮付け、味噌汁、そして焼き魚に、カワハギは煮魚と肝の味噌汁に、トビウオは焼き魚にすることに決定した。その後、必要となる調味料を調達するため、買い出し班に連絡した。

かまどご飯炊き班は、火をおこし、薪をくべ、常設された三岡へつつい（かまど）を使用してご飯を炊いた。平行して、カセットコンロと鍋でもご飯を炊く準備を進めた。更に、魚さばき班の進度に合わせ、七輪に炭火をおこし、焼き魚の準備も進めた。米は、全員が1合ずつ持参することで用意した。

買い出し班は、魚さばき班と連絡を取りながら、近隣のマーケットにおいて、追加で必要となる調味料や味噌汁の追加具材、お皿、紙コップ、菜箸、割り箸などを入手した。買い出し終了後は、調理に加わった。

調理時間は約3時間であり、13時頃から昼食を取り、片付けが終了したのは、14時過ぎであった。



ワラサさばき中



トビウオの塩焼き中



かまどで炊飯



鍋とカセットコンロで炊飯（失敗）



成果物



昼食中

図2 調理開始から昼食開始まで

今回、企画段階では、昼食を作ることのみが決まっていたので、全てがその場対応での作業となった。このような環境での調理体験に関する調査となったため、様々な検討すべき点について、各自が体感的に学べる事例となった。更に、当夜の夕食時に、民宿の女将とこの話題

となったとき、「事前に相談があれば、魚さばきや調理の支援（指導）も可能であった」とお話し頂いた。いろんな場面で、地域の方々の協力を得られる可能性があり、活動予定地域あるいは、自身の勤務校の周辺に、どれだけ学校行事あるいは教育に支援を頂ける機関があり、人材がいるか、人的ネットワークを拡げていく意味を考えさせられる事例となった。

5-5. 新規、町内融合学習プログラムの開発

食後の片づけ終了後、館内の展示物や資料を再確認した後、15:00頃から2人ずつ4組に分かれ、それぞれの観点から、町内学習融合プログラムの検討を始めた。このミッションに関する指示は、「学校利用に留めず、子どもたちの関わるきいばす利用法または、現状の改善を考える。」とした。2人組の選考は、今回もLINEのあみだくじ機能を用いて行った。それぞれの班で、2時間程度検討を進めた結果をもとに、担当教員2名が順にディスカッションを行った。議論の内容は、翌日のきいばす職員に対するパワーポイントによるプレゼンテーションまでに行うこと、すなわち、現状からこの後発表資料にどのようにまとめるか、再度検討する内容は何か等である。この後、学生は、再度、館内の展示物を確かめたり、より効果的でわかりやすいプレゼンのための画像データの収集をしたりした。

プレゼンテーション資料の作成は、民宿に戻り、夕食・入浴後の就寝までの時間に継続して行うこととした。

5-6. きいばす職員に対する新規プログラムの提案と質疑応答

第3日目の朝8時過ぎにきいばすに到着し、2名1組で企画立案した内容と口頭発表資料について最終確認を行った。10時からきいばす職員に対して、4つの提案プログラムを順にプレゼンテーションした。きいばす職員は、小学校教員、町の行政職員、エネルギー環境教育のスペシャリスト等で構成されている。それぞれの提案に対して、それぞれの目線からのアプローチがあり、実現の可能性について様々な角度から、ある意味、学生たちにとっては、とても厳しい質疑応答が展開された。前日に指示したミッションでは、「アイデアの提案が中心で、実現の可能性までは問わない。職員の皆さんが、学生諸氏のアイデアをもとに可能なものから検討するので、その端緒となるアイデアを提供して欲しい。」と指示していたため、一部の職員の思い（近々にも実現できる改善案を聞きたい）とは、少しミスマッチが生じた。学生にとっては、現実の厳しさも感じさせられる場となった。以下、各提案とその概要について示す。

【提案1】月1回ではじめる きいばすNEWプログラム

ファミリー、有志、子ども会やPTA等の団体を対象とした、半日プログラムを設計し、はあとふる体験ときいばすの施設活用の相乗効果を期待した。はあとふる体験

にある船釣り体験、若狭湾・波止場釣り体験または三方五湖しじみ漁を行った後、きいばす既存プログラムであるかまど体験+調理実習を組み合わせたもの。調理の内容や必要な食器・道具、きいばすのどのスペースを使用し、本プログラムを行う際の移動手段や広報までの提案を行った。

きいばす職員からは、はあとふる体験を行った直後に会場を移動し、調理体験を行い、昼食に持ち込むことは、実際には難しい。日程を考えた場合、1日プログラムとなってしまうが、ランチ用に軽食を準備あるいは持参頂き、昼頃から調理をはじめ、少し遅い昼食にあてるようなプランの方がよいかかもしれないとの感想があった。

【提案2】電気を生み出そうー昔遊びから考えてみるー

園児から小学校低学年とその保護者を対象とした2時間プログラムについて検討し提案。自分で電気を作る（手回し発電機など）。昔のおもちゃや遊び（風車・トントン相撲・おはじき・竹とんぼ・縄跳び・ぶんぶんゴマなど）を用いて電気を発電してみる。これらの体験活動を通じて、小さな電力はつくれるが、（ものを動かすような）大きな電力は簡単にはつけれないことを実体験してもらう。但し、この計画が達成できるかどうかについては、理科的な背景も含め不明。その他、開発途中で挫折した試案3件についても合わせて発表した。

きいばす職員からは、小さい子どもへの説明は、現在でも課題。このアイデアを活かす場合の分かりやすい説明を考えて欲しい。また、途中まで考えた案①（大学教育学部、理学部、文学部等の理科・社会科系の学生が対象の野外実習を伴うゼミ合宿。美浜の自然ときいばすを活用したプランの策定）について、実現の可能性を感じる。社会科的な視点を加え、タイムスケジュールまで考えてくれないかという前向きな意見があった。大学生が見出す可能性ときいばす職員の見出す可能性との差を感じる場面であった。

【提案3】体験プログラムのつながり

家族連れや友だち同士で遊びにきた子どもたちを対象とした1時間程度のプログラムを提案。館内のエネルギー体験展示ラリーの内容を精査し、昔体験、エネルギー体感、消費電力調査、電力ミックスシミュレーションの4つのコースに整理・分類。これらを仲間体験しながら学べるように、現状のワークシートに関して、小学生はスタンプラリー形式、中学生は、クイズラリー形式への改定を提案。きいばす入館後の対応として、これまでのスタッフが館内を説明しながら一緒に回る形式から、入館者が個人的に回る形式への転換を提案。子どもたちが自分で学び、発見する、という人材としての育成にもつながるのではないかと学生が考えた結果である。

きいばす職員からは、この改革により生まれる「手の空いたスタッフ」の活用方法の提案、中学生向けクイズの具体例と改訂版ワークシートのサンプルの提供依頼などの具体的な依頼を受けた。これを受け、後日、サンブ

ルとして図3を回答した。

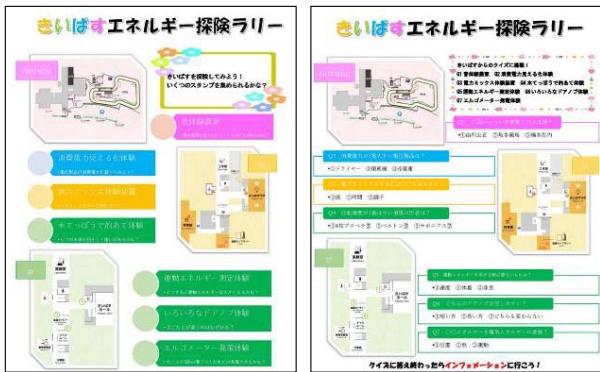


図3 ワークシート(案) 左:小学生, 右:中学生.

【提案4】地域学習プログラムの検討

嶺南地域の小学6年生を対象とした理科と社会科の総合的なプログラム「エネルギー教育と社会の変容」を提案。電気と私たちの暮らし(理科3時間)と大昔の暮らし(社会科3時間)に対応させ、新規の一単元として構成し、ねらいを①体験・体感、②きいばすの利用、③地域を考える、④教科のつながり、⑤エネルギー環境を見つめなおすとした。以下、事前、現地(きいばす)、事後学習と分けて記載するが、実際には、授業の流れの中に組み込むため、特別な事前・事後学習という設定にはしない。

事前学習(2時間)では、社会でのエネルギーの変遷、手回し発電機から発電への興味関心の高揚、電気とエネルギーの関係、生活の中の電気、エネルギーの節約と原子力発電などを取り上げる。事前学習を受け、きいばす施設内の体験的展示教材(身近な電化製品の消費電力の見える化、自身の運動エネルギーによる発電量の確認など)を活用し、理解と知識の定着を図る(1時間)。昔体験として、七輪とカセットコンロの使用を通じて昔と現在の火の扱い方・使い方の違いを実体験させる(1時間)。事後学習(2時間)では、これからの暮らしについて、エネルギーの利用法、節電、エネルギー環境、地域環境、地域の電力問題等について振り返りシートの作成、グループ討議、そしてシートの校内提示による共有を行う。一連の流れの中で、校外学習で子どもたちの興味関心を高め、教科の横断的な学びを創造することを目的とした。

職員からは、きいばす施設の体験の説明を具体的にしたい。館内施設のより具体的な装置の活用方法を教えて欲しい。「エネルギー環境を見つめ直す」その意図するところは何か。地域の電力問題をどのように教えるのか。きいばすには原子力発電所に関する展示はないが、きいばすを通じて原子力発電所についてどのように考えさせるのか具体的に教えて欲しいなどの意見を頂いた。これらは、きいばすがこれからエネルギー環境教育の全国拠点として成長していくために不可欠な部分であり、特に、質問されたものと予想される。

5-7. 現地実習および地域連携教育研究A・Bのまとめ

現地実習を終えた翌週の授業時間中に、3日間の体験の省察を行った。その後、数週間かけて、きいばすに提出する「提案書」を作成し、現地実習のまとめとした。各自、きいばす職員とのやり取りを踏まえ、実現可能と考えられる事業化を意識した提案書の作成を進め、担当教員の添削指導の後、きいばす職員に提出した。この過程は、小学校における特別活動を通じた資質・能力の育成目標⁴⁾、すなわち、第1章に示した目標3項目(③~⑤)の指導力養成、更には、地域と連携した教育、そして、地域の特性を活かした教育を進める力量形成に資すると考えている。

引き続き、3回の授業時間と課外学習時間を活用しながら、今回の実習に加えて、昨年度受講した地域連携教育研究Aの地域連携に関する3つの事例を含めたポスターを作成した。作成したポスターを使用し、地域の社会教育、生涯教育や学校教育をサポートする機関や個人の集まる「福井ラウンドテーブル2017 Summer Session」にて、活動と学びの報告を行った(図4)。更に、地域連携教育研究AとBの全ての学びを統合し、省察したレポートを各自作成した。以上、ポスター発表と学びの統合レポートを地域連携教育研究のまとめとした。



図4 福井ラウンドテーブル2017 Summer Session

5-8. 現地実習を通じた学生の学び

今回の現地実習を通じての学びを、学生のレポートから考察する。以下はレポートからの抜粋である。

○ 3日間の現地調査で学んだこと
<ul style="list-style-type: none"> ・「百聞は一見にしかず」とはよく言ったもので、現場で実際に目にする事、体験することの大切さをひしひしと感じた3日間だった。紙面などで見るのとは違い、実際に各方面の方からお話を伺い、生の声を感じ、リアルな体験をさせていただくことで、ただ講義・講演で耳にする以上の体感をする事ができた。 ・3日間の調査の中で、特に印象に残ったのは大敷網体験である。大敷網体験では、普段なかなか生で見ることができない漁の現場を間近で見ることができ、生命の力強さを感じることができた。そのため、もっと多くの人々にこの若狭美浜の伝統漁法を知ってもらい、漁師の方々と一緒に網を巻き上げ、自分の手で魚を獲るという感動を味わってもらいたいと感じた。また、きいばすでのかまど・魚さばき・調理体験では、初心者である私たち学生が事前に魚をさばいたり、かまどでご飯を炊いたりする練習をすることなく、ぶっつけ本番で体験を行った。しかし、どれも自分たちが満足のいく仕上がりに出来上がったため、これまでになく達成感を生むことができた。 ・この3日間では、今まで体験したことのない様々な貴重な体験をする事ができた。地域連携教育について、新たな

視点から考えることができた。また、具体的な取り組みを聞き、現実味を感じることができた。漁やかまど体験といったなかなか取り組むことのできない体験ができたのは、とてもいい経験になった。生命の大切さや昔の人の暮らしなど考えられることが増えた。

- ・最初にインタビューを行い、それを元に大敷網体験、そして買った魚を調理し、かまどで炊いたご飯を皆で食べて、プログラムの発案、という流れで、実際は二泊三日といったような時間であったが、なかなか体験することのできないことを詰め込んだ濃い時間であった。一日で大敷網のような体験をして、そこでとれた魚を調理して食べて、帰る、という流れよりも、実際にその土地に泊まって、その地域の人と会話をし、関わりを持つことで、「美浜」という土地に愛着を強く感じるようになった。
- ・3日間の現地調査をして非日常を感じられる体験がたくさんあったため新鮮な気持ちで活動することができた。きいばすや小学校、はあとふる体験でのインタビューなどといった普段行うことができない貴重な体験がたくさんすることができた。かまど体験や大敷網などといった活動に取り組むことで新たに得られたことがたくさんあった。3日間にあったどの活動もよい経験になったと感じる。
- ・きいばすやはあとふる体験など、学ぶことの多かった3日間であったが、非常に楽しかったといえる。やはり、学外学習というものは、学校という場所を離れて現地でしか体験できないこと、現地でしか学べないことを吸収することができる。こういった経験は、やはり楽しくないわけがない。近年の学校教育において、アクティブラーニング、主体的な学びというものが注目されている。私は、学習というものが、学習者本人が意欲的に主体的に学ぶことが非常に重要だと考えている。学習というものが本当はとも面白いということ、こんなにも素敵なことなんだ、ということをもっと子どもたちにも知ってほしいと思う。そのためにも、きいばすや、はあとふる体験といった学習がそういった役割を担ってもらえたら、福井県の教育がより向上していくのではないと思う。更に、3日間の現地調査から、美浜町の人々の温かさというものを直に肌で感じた。美浜が本当に好きだということ、もっと美浜の良さを伝えたいという思いがとても伝わった。私は、そんな地域愛あふれるところで研修できたことをすごくうれしく思っている。この研修から、より美浜を知りたくなり、もっといろいろな人に美浜の素晴らしさを伝えたいと思った。例えば、大学生のうちに美浜に関する企画を立案しPRできたらと考えた。
- ・私は、魚さばき・調理担当だった。約50～60cmくらいあるワラサをさばくことになった。魚さばき班には誰も先生がつかなくて、わたしを合わせて学生3人だけで魚さばきを行うことになった。誰も魚をさばいたことがなかったので、携帯でそれぞれさばき方を調べて、自分たちなりにさばき始めた。きいばすには、刃の小さい包丁しかなくて、ワラサをさばくのがすごく難しかった。ワラサの顔を落とそうと思って包丁を入れたときに、大量の血が出てきたとき、腹のところからすごく大きい内臓を取り出すときは心が折れそうになった。しかし、誰も助けてくれないので3人で嘆きながら魚をさばくことができた。大変だったが、すごい大きな達成感を味わうことができた。かまど体験は行ってないのでわからないが、昼食のときに食べたおにぎりはすごくおいしかった。
- ・インタビューを進行していく難しさ
きいばす職員、小学校の先生方、はあとふる体験の関係者に対してインタビューを行ったが、その形式は三者三様であった。きいばす職員の時は私たち側からの質問が主だったのに対して、小学校では小学校側からの話を聞くことが主となった。はあとふる体験では、始めに概要説明があった後、私たちが質問をした。限られた時間の中でどのよう

に自分が知りたいことを聞き出すかが問題であった。

- ・タイムスケジュールを考える上での注意点—大敷網体験を通して—
はあとふる体験では朝3時30分に起床してすぐに漁に行き、漁船に乗って迫力のある魚を見ているワクワク感があったためか体験中はどのようなことはなかった。しかし、朝食後からどっと疲れが出た。仮眠をとった後も疲れは残っていたが、仮眠をせずに活動を続けていたら体調不良で倒れてしまうことがあるかもしれない。過度に休憩をはさむことでより充実した研修になることがあるということ、身をもって実感した。

すべての学生にとって、今回の活動、すなわち、関係者へのインタビュー、民宿での合宿、大敷網、不慣れかつ道具の揃っていない環境下での調理体験、きいばすの全体像を把握できていない状況下での新プログラムの提案とそのプレゼンテーション、そしてそれに対するきいばす職員からのストレートな質疑応答、これらのほとんどが初体験に近い状況であった。レポートからは、常に緊張感を持ち、真剣に取り組むことができたからこそその充実感を得ていることが読み取れる。更に、1年間ともに初等教育コース3系の仲間として学んできた8人の関係性も含め、この初体験の連続を楽しむということもできていたことが推測できる。

2泊3日のプログラムについて、企画者（大学教員）側からすると、少し内容を詰め込みすぎたところも否めないが、息つく暇もないプログラムを学部2年生が意欲的にこなしていく様子を間近に見ることができた。

5-9. 当初目的の達成状況評価

2泊3日の現地実習と、その事前事後学習で構成された授業プログラムに関して、当初の目的の達成状況について評価した。

まず、冒頭に提示した視点①「地域と連携した教育の望ましい在り方や教育の展開方法についての理論的な理解」について評価したい。今回、地域連携教育研究Aにおける理論的な学習を踏まえ、地域連携教育研究Bにおいて、現地での授業プログラムに取組み、そして、地域連携教育研究AおよびBの学習（実習）内容を統合したポスターの作成と発表および最終レポートの作成を行った。この体験的な学びを通じて、理論と実践の往還を図ることができたと言える。その成果はラウンドテーブルでのポスター発表の場で、大学外の公民館主事・行政職員等、社会教育や地域連携教育関係者からの質問や指摘事項に適切に対応し、議論が成立していたことから伺うことができる。しかし、今回の一連の地域連携教育研究AおよびBでは、事例をよく知るという側面を重視したため、体験した個々の事例にもとづく考察はある程度達成できたが、「地域の中の学校」「地域連携による子どもや学校の抱える課題の解決」といった、より広い視点における総括的な考察はまだ不十分であると考えられる。実際、最終レポートにおいて、学生から、「地域と結びついている学校の実態、そこに至るまでの過程につ

いて福井県内にとどまらず調査を行いたいと感じた」というコメントがあったり、「現在の圧迫された授業時数のなかで、精いっぱい各学校が地域連携教育を取り入れている」なかで、更に何をすべきなのかという問題を提起したりしている。ただ昨今の国の方針だからという前提で出発するのではなく、地域と連携することで何が得られるのかという問題を、しっかり自分の頭で考えさせることが重要である。

次に、視点②「地域の教育リソースの発見、開発、および活用力を身につける」について評価したい。発見・開発および活用の提案までは一定の成果を挙げたと考える。美浜町というフィールドを取り上げ、地域の科学的な機関であるきいばすの職員、きいばすを活用する小学校関係者の考え方、更に、地域の自然と産業を活用する事業を展開するはあとふる体験協議会関係者へのインタビューを通じ、三者の立場を学ぶ機会を提供できた。特に、学校関係者へのインタビューでは、外部機関（きいばす）の学校利用の現状と考え方を詳しく学ぶことができた。更に、小学校における地域連携担当教員の実際についても学ぶ機会となった。これらの現状を2名1組で分析・統合した上できいばすの活用方法を考える授業プログラムは、地域のリソースの発見力・開発力・活用力育成に繋がっている。ここでは、学生は、「地域の中だからこそ子どもたちが学べることがある」とこの実感をも、確かに得ている。一方、学生自身から、「地域と連携した小学校における学習プログラムを企画し実現していくためには、各学校の授業計画との整合性をとるといった課題への対応、そして地域の方たちとの関係づくりやスケジュール調整が重要である」という認識が示された。例えば、学生の一人は「“人との結びつきの中での学び”といった観点から言えば、用意された空間での出会い、コミュニケーションは経験できているものの、こちら（学生）側からの働きかけで関係を結んでいく、といった経験に関しては、ほとんど実践できていない」と指摘している。別の学生は、「地域連携コーディネーターの役割が重要」と指摘し、「地域連携教育は思っていたよりも企画・運営して行くことが大変であり、教師1人では担いきれない課題が多くあるなと感じた」という感想を述べている。今回は学ぶ側であった学生たちであるが、将来は教員として学びを設計する側に立つことを意識しはじめ、例えば、学校からの交通手段や所用時間といった具体的な条件や、また今回の合宿学習を実現するためにどれだけの企画者側の準備や努力が必要なのかという点に強い関心を示すようになった。地域連携教育を推進するという目標に向かって、どのような資質・能力が必要とされるのかを、実体験から強く認識し始めたと言える。

次に、他者との協働、合意形成といった、特別活動の目標に関連する③④⑤の視点から評価したい。本授業そのものを特別活動として捉えれば、8名という小集団の

なかで、各活動場面において、2～3名1組のチームを場面ごとに組み替えながら、その中でお互いに協力し学習を進めて行く経験を積む機会となった。例えば、

- 自分たちで自主的にグループ編成を行った場面
- 漁師の方々と一緒に網を巻き上げ、「自分の手で魚を獲るといった感動を味わってもらいたい」と感じた場面
- ほとんど指導のない状況下で、3人で協力しながら魚をさばき、調理することができた場面
- 2人1組あるいは、4人1組で協力し、成果を口頭発表した場面
- その発表に対する、現実を見通した厳しい質問へ、相互に協力しながら対応した場面

これらの場面等を通じて、特別活動を通じて身につけることが期待される資質・能力の意義、学びの力について、再度確認する機会となったと言える。地域と連携した教育は、特別活動という枠組みのみで行われるものではないが、両者の親和性は高いことは事実であり、学習の目標設定について学習指導要領に述べられている抽象的な事項を自分のなかで理解できる事項へと落とし込んでいくという点で有意義であった。

一方、今回参加した8名の学生にとって、エネルギー環境教育というテーマは、必ずしも専門性の高い分野とは言えないものであった。プレゼンテーションのために、きいばすの資料室で理科や社会の教科書を参照し、また、インターネットを通じた情報検索を行うことで、アイデアを練ったが、学習内容という点では、事前の準備がもう少し必要であったと言える。小学校教員として教科横断的な視点や力量は必須であり、教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する能力の育成およびカリキュラム・マネジメントの実践の場としても有効であったと考えられる。

終わりに

今回の「地域連携教育研究B」は、民宿、漁師、小学校教員、きいばす職員、はあとふる体験協議会事務局員、更には、きいばすに來られた一般のお客様など、様々な立場の人々と関わりながら、地域と連携する意義を学び、地域の教育リソースを発見し活用することに挑戦し、また、自身の活動を通じて、特別活動における遠足・集団宿泊的行事における留意点や企画能力（教科・領域を横断して教育内容を選択・配列する能力を含む）についても育成可能なプログラムとなったことで、一定の成果を挙げたと考えられる。こうした実地実習を組み込んだ学習プログラムを複数人数が体験し、事後学習において各自の意見・考察を共有し議論することで、多様な視点や課題を自主的に発見していくことができる。

また、ICT活用についても、事前事後学習におけるインターネットを通じた情報検索、口頭およびポスター発表のためのプレゼンテーション資料作成はもとより、YouTube等の動画資料やコミュニケーションアプリ

LINEの活用など学生のアイデアも盛り込みながら進めることができた。

課題は、前年度の「地域連携教育研究A」も併せて、学生のなかで培われたこうした視点や問題意識を、今後の学習や活動の展開のなかでさらに高めていくことである。これは、3系（学校・地域連携系）のみならず、初等教育コースのカリキュラム全体と連動する事項である。今後、学部教育カリキュラムのなかで有効に機能する「地域連携教育」のあり方について、更に省察し、「地域連携教育研究」をベースとした地域連携担当教員の養成や特別活動の指導、更には、教科横断的なカリキュラム・マネジメント等に資するモデルカリキュラムの構築に臨みたい。

謝辞

本授業プログラムの実施にあたっては、美浜町エネルギー環境教育体験館さいばす職員の方々、美浜町美浜東小学校の先生方、はあとふる体験推進協議会の方々にたいへんお世話になりました。この場を借りて篤く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 中央教育審議会, 「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について (答申) (中教審186号)」 (2016) 文部科学省HP URL http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365761.htm (最終確認日: 2017年9月1日).
- 2) 文部科学省, 「平成29年3月公示小学校学習指導要領」 (2017) 文部科学省HP URL http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (最終確認日: 2017年9月1日).
- 3) 浅原雅浩, 風間寛司, 澁谷政子, 寺尾健夫, 隼瀬悠里,

三浦麻, 「福井県における学校と地域の連携・協働を担う教員養成プログラムの開発: 「地域連携教育研究A」 報告書」 (2017).

- 4) 文部科学省, 「平成29年3月公示小学校学習指導要領, 第6章特別活動」 (2017) 文部科学省HP URL http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm (最終確認日: 2017年9月1日).
- 5) 若林憲子, 「グリーンツーリズムの教育旅行による農家民宿・農家民泊受入と農業・農村の展開可能性」, 地域政策研究, Vol.15, No.3 「吉田俊幸教授退職記念号」, pp.159-179, (2013).
- 6) 坊安恵, 中村貴子, 「体験教育旅行における受入農家民泊の普及過程に関する研究: 滋賀県東近江市愛東地区を事例として」, 農林業問題研究, Vol. 49, No. 2, pp.409-414, (2013).
- 7) 上村真千乃, 「修学旅行における民泊の社会的認知要因と観光の商品化ー沖縄県伊江島を事例にー」, 立教観光学研究紀要, No.16, pp.89-91, (2014).
- 8) 林尚示, 「特別活動における自然体験活動型の集団宿泊活動の役割」, 東京学芸大学紀要. 総合教育科学系I, Vol. 62, No.16, pp.31-41, (2011).
- 9) 山本隆太, 松尾由希子, 「特別活動における自然体験活動に関する考察: ジオパークを活用した地域連携、教科横断的な学習に向けて」, 静岡大学教育実践総合センター紀要, Vol. 26, pp.211-216 (2017) .
- 10) 日本ジオパークネットワークHP URL <http://geopark.jp/> (最終確認日: 2017年9月1日).
- 11) 日本原子力文化振興財団, 「エネルギーとかんきょう: 美浜町エネルギー環境教育副読本: 教師用指導書」 (2009).
- 12) 若狭美浜はあとふる体験HP URL <https://heartful-mihama.wixsite.com/mihama> (最終確認日: 2017年9月1日).

Developing a New Education Program for Training Teachers Aiming at Enhancing Collaboration with Regional Communities: A Case Study on “Study of School Education in Collaboration with Regional Communities B”

Masahiro ASAHARA, Masako SHIBUYA

Key words : Collaboration with Regional Communities, Special Activities, Planning and Management, Interviews, Group Stay Event, Utilization of ICT

